
第三のA

こたろう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第三のA

【Nコード】

N1266T

【作者名】

こたろう

【あらすじ】

不安定な作風で綴る、不安定な少年の日常。

1・複数犯『平山栄』（前書き）

うわあああん！働きたくないよお！

1・複数犯『平山栄』

挙動不審。立ち振る舞い、動作、様子がおかしいこと。

「はぁあっ！」

平山栄は一体何をやったのか。前科持ちか。指名手配されているのか。そうではない。しかし、彼は暴れているのか慌てているのか傍目にはわからないような挙動で、ここ『ちいかま公園』のきつたねえ公衆トイレの個室の中に駆け込んだ。

シユパアと、もう慣れっこというような手際でドアロックをかけ、そこから始まる一連の動作であるかのように髪をかき上げ振り乱し絶叫する平山。

「あぁっ！ 女！ 畜生才カマ野郎！ くっそくそくそ！ あぁあぁあぁー！！！」

備え付けのトイレトペーパーを全力で回し取り、巻いて巻いて、白の巨大なとぐる状にして換気窓の前に置いた。「おら、一丁あがり！」それによってほんの少しの平静を取り戻した平山だが、彼に迫る事態、置かれた状況は何も変わってなどいない。

「はやく、はやく人格を……どれでいく……早急に選ばないと……」
女か？ いや馬鹿か。女は駄目だ。あいつはもう駄目だ。最悪だ。じゃあ男連中のどれか……。ううつ、はぁっはぁっ、くそ。どーすんだ畜生、定まんねえ。外出れねえ。あぁあ……。

危ない独り言を呟く平山栄、十七歳。彼は多重人格というサイコな精神障害を患っている……。んだと思う。ひよっとすると痛いセルフ設定か、もしかすればホラかもしれない。神様でない筆者に本当のことはわかりません。

つい先刻まで平山を支配していたのは、彼唯一の女人格『a』（爆笑）

平山自身もねこっ可愛がりしちゃうほどの、どこかその辺を歩いていたら抱きしめたくなっちゃうほどの可愛らしい思考の持ち主、

それが『a』だ。

しかし今の平山は、彼女を「オカマ野郎」と罵る程に憤慨し、否定していた。

今より数分前のことである。平山は学校からの帰り道で、中学時代彼を虐めていた先輩にバツタリ出くわした。

平山の持つ人格多重性は、そもそも先輩の虐めから心を防衛する為に備わったものだ。と平山自身よく語っている。しかし、その先輩とは当然別の高校に進学して、この二年間のびのび学生生活を送っていた平山は、緩い環境の中でのみギリギリ許されるか許されないかも微妙な女人格、『a』を発現させていた。

そして、現在進行で『a』であった平山自身は、それが狂おしい程の自己愛から生まれたお遊び同然の人格であり、他者から見ればただの痛い奴以外の何者でもないなんてことはとうの昔に忘れてしまっていたのだ。

「あつ、せんぱい」

平山くん、凄く綺麗なフルセットですね。先輩は一瞬ギョツとしたが、チワワのような瞳、笑顔が弱く、内股、今の平山が、受けた虐めを嫌々ながらも許容する最高に都合の良い弱者であることはすぐに見抜いた。

だが、オカマめいた平山が少し、いやかなり気色悪かったので、牽制のつもりで「ちよつと千円貸してよ」という、彼の持つ先輩観では当たり障りのない要求から入ってみることにした。

「えっ……ええ……」

平山はもじもじし始めた。「あ……う……えと……」何か言おうとして唇とか、頬のあたりが震え出すが、先輩から見たらいいよ冗談抜きでキモいだけだった。

「あ……と……」

このあたりから、平山の中に疑念が湧き始める。俺は『a』でいいのかと。可愛くて可愛くて、地球の平和を必死で考えてる自分がたまらなく愛おしくて今まで続けてきた女人格だが、ここにきて、

明らかに先輩に通用しないことで、確信めいたそれは一気に揺らぎ始めた。

ひょっとして、周りからもずっと変な目で見られてたんじゃないのか

平山は真理に到達した。

「すっ！ すいませ、すいませ先輩、わた私っ、おれ、ちよっと下痢、トイレいいです！？」

さしかかった『ちいかま公園』の公衆トイレを指差し、錯乱もひとしおの平山は、先輩の肩組みを振りほどき、変なフォームで全力疾走した。

呆氣に取られる先輩を残し、公園内に進入。鉄棒くぐって砂場を抜け、トイレ内、手洗い場の鏡をつい横目でちらっと見つつも、個室内にバタバタ駆け込んだ。

そして平山栄は今に至る。個室ドアを背に息を切らしながら、女人格『a』への恨み言を連ねていた。

「なんだあのザマ……なんだあのザマは平山栄、俺！ まるでしどろもどろだったじゃないか……。なんでなんで、なんで俺は今まであんなオカマ精神に甘んじていたんだ……」

後悔も兼ねつつ、平山は必死に次の自分の『顔』を探す。千円貸せと言われた。平山の財布の中身はピシャリ千円。それは今日明日の夕飯代だ。天地ひっくり返ったって貸すわけにはいかない。

先輩をボコボコに打ちのめす程の凶暴な人格があればいいのだが、どうかあるのだが、いかんせん平山栄の体格では闘うこと自体に無理がある。『c』とか、そのあたりでネーミングしてあったらどうか、もううる覚えである。その『c（仮）』は、テレビゲームで殺戮モードに没入する際や、美術の時間にイカれた絵を描きたい時以外の用途がはつきりいつて見当たらぬ。

「やっぱし、あいつで……『A』でいくしかないか……」

少しでも痛いと思ったなら読むのをやめていい。『A』、その名の通り、平山栄の中でのエース人格である彼は、多少の愉快犯的思

想に目を瞑れば、何事も入りすぎず退きすぎずの位置からの確に物事を対処できる、平山にとって最理想の人格であった。

それが何故今まで封印されていたのか。平山は自らの生来の少女化願望が憎くて仕方ない。

「平山あ！ 待ってんだぞ俺は！」

先輩の怒号がトイレ壁を反響した。凄く久しぶりに会って、もうこの態度の大きき加減。やっぱりこいつは最低だ。本気で脳に欠陥のある人間だ。千円借りた後はあの頃のように街を連れ回す気だろう。そんな後輩を虐めて楽しいか……楽しいか……。平山は唇を震わせた。

「大丈夫だ……俺ならやれるはず。『俺』なら、『A』なら、なんだってうまくやれる……」

「おい平山！！ もう糞も出たら、早く」

ガタン、と、平山は流れるような手つきでドアのロックを後ろ手に外し、扉の可動に沿って個室外に退出。すぐドア前に迫っていた先輩の目前に現れ、対峙した。

「やあ、快便でしたあ、先輩」

頭一つぶん身長差のある顔をニヤついて見上げる平山栄。

「は……快便てお前……」

した形跡、流す音すらなかった。先輩 今更であるが石間秀人、十八歳は、流石に馬鹿にされたことに気づく。急に飄々と態度を変えた平山の、下から見下したようなその表情も、彼の中の短気な起爆線にジャスト接触した。

石間はポケットに入っていた右手を、半笑いの平山の顔に向け突き出した。

気に入らない者には“まず手が出る” 幼稚だが、それでも石間は大分大人になった方だ。中学の頃なら、出ていたのは足だった。その日は急に平山が反抗的な目をしたので、石間は条件反射でローキックをかましたのだ。だが

「あっ！？」

そう、その時のローと同じように、今の石間の手も払われた。正確には、軌道を逸らされた。平山栄の非力さでは正直なところそれが限界だったが、勢いの残った石間の手は、その甲をトイレ個室ドアに思い切りぶつけていた。

「いつ、てえ！」

「ははは」

平山は大袈裟に悶える石間を笑いながらも冷たく見据える。つめたいつめたい、やだよ！ 人が痛がるのを笑ってるなんて、それじや世界がちつとも平和にならない、優しさが消えちゃうよ！ 彼の中の『女』が騒ぎ出すが、平山はやめない。冷たくていい。否定するものは否定して、嘲笑って、それで自分を守っていくんだから。

次に石間から出るのは足か、また手か。いや、石間は俺を攻撃できない。遙か遠くからずつと嘲笑している俺を、石間は一切攻撃できない。平山はそう確信する。そして同時に感謝する。中学の頃の虐めがなければ、今の自分は存在していなかったと、感謝する。そして、今自分をここに引き戻してくれたことに

「ありがとうございます、先輩。財布に千円あるんで、まあ牛丼でも食べにいきますか。奢りますよ」

「へ？」

平山栄の中には、そもそも断るという選択肢が存在しなかった。

与えられた要求を捻じ曲げて捻じ曲げて、自身のプライドが傷付かないように再形成する。愉快犯 置かれた状況を総合的に嘲笑う『A』の、それがやり方だった。

二人は並んでトイレから出た。「いいって、いやマジいいって奢りとか。俺先輩だぜ？」一転して退き気味の石間を平山は強引に押して、その足でバイパスにある牛丼屋に向かった。

大盛り牛丼にとろろを追加。それを二人ぶん頼んで、平山栄の財布はこの日、空になったが、自分も、先輩も、誰一人傷つくことなく一日を終えた。最悪な先輩だが、微妙に仲良くなれた。

これでいい、と、石間と別れた後の帰り道で平山は思う。

何故なら、一つ一つの形は違えど、平山栄という人間は総じて、世界平和を願っているのだから。

1・複数犯『平山栄』（後書き）

がんばって続きも書いてみます。

2・愉快犯『A』（前書き）

作風の非統一感がとても申し訳ないです。

2・愉快犯『A』

“すつごいやる気ない”

平山は今の自らの状態をそう評した。散らかった部屋で足をだらしなく伸ばし、そう、糸の切れたマリオネットの格好で壁を背に置かれたような彼。

平山を置いたのは誰か。それは親か。もう十七歳、いい加減子供では通用しなくなってきた平山自身か。

「どうでもいいね」

ざあつ、と更に平山の身体はずり落ちる。オモチャ、漫画、服、散らかったそれらを押し出す平山栄の波。

ころんと横を向いた平山の顔。ふと、ベッドの下の際間のいかかわしい雑誌が目に入る。

「ああ……そんな気分でもない」

そう言いつつ、ベッドの下のそれに手を伸ばす。家に来た友人の誰かが置いていった代物だ。以来平山は、それをもういい加減、何遍も使った。猿のように使った。

「流石に飽きた感はないね……って」

立ち上がった平山が無気力な溜息を吐いたのと、ガチャリと部屋の施錠をしたのは同時。思考と行動の不一致。平山が必死に訴える自身の人格多重性とはかなり別のところで起こる精神現象。いや、平山はただの自制が効かない人。

「ば……ばか、何がしたい俺……。こればかりは本当に何も生み出さないぞ……」

ベッドの上に開いたページの女に上から迫る平山。今の平山は一体どの『平山栄』なのか。それは弱すぎる本来の彼自身、あるいは、平山栄である彼（彼女）ら総員である。

そして、印刷された女たちは誰も皆、平山にとってはもうただの記号だ。記号を目で必死になぞりながら、制服ズボンのベルトに手

をかける。これは儀式。もはや作業。もう言葉もこぼれない。

と、遂に下着を下ろそうとした平山の手が止まる。

刹那の硬直の後、堰を切ったように、

「う、あああああつ！　あああああ！！」

絶叫、そして雑誌を開いたページから乱暴に驚掴みにし、平山は部屋内数メートルに満たない距離を大振りで疾走、窓に手をかけベランダを開放し、それを野外に全力投棄した。

バタバタと風にめくられながら理不尽な軌道で落下していくエロ本。平山は息を切らしてそれを見届ける。

「はあつ、はあつ……」

“いつものことさ”

そう自分に言い訳をして、腹痛を訴え学校を早退した今日の平山家に帰ってきた彼は何をするでもなかった。それどころか、また猿になろうとしていた。

「時間が憎い……。有り余る時間が俺を暴走に駆り立てる……」

彼は高校を卒業して数年後には、これと真逆のことを言うようになるのだが、それはさておき、

とにかく、素の平山栄には行動指針というものがなかった。例えば反社会的な人格であっても、何か有意義な行動を起こす為にはそれに頼る必要があった。

仮面のようなものだ。それがなければ、平山は普通に人前に出ることもできない。どれが本当の自分なのか、わからない。今の自然な自分は本当の自分ではないのか、それもわからなくなった。

「憐れ……憐れな俺……」

平山は完全に自己に酔っていた。

身体をさらいそうになる五月の風。十四時の高すぎる日の光に背を向けて、ベランダ床に裸足の平山は窓を閉め、自らを閉め出す。外光のぶんだけ薄暗く窓に映る平山栄の顔を、平山栄は右手で覆った。

「ははは……」

その口元は意味もなく笑って、今の平山栄は愉快犯であった。
「ナンパでもいくか」

制服のまま外に出た平山の横を、サイレンを鳴らした救急車が通り過ぎる。

平山は「おつかれ」と見送った。

歩いて駅前の方に向かう間やることがないので、とりあえず携帯を取り出す。高校に入ってこれを持たせてもらう以前は、歩きながらすることと言えばもっぱら妄想だった。

その頃の妄想が今の平山に影響しているのかと問われれば、平山は「違う」と断言するだろう。これは中学時代の先輩の虐めからの精神防衛の為の現象だと、普段総合的に大人しい平山栄たちは口を揃えて言って、決して譲らないだろう。

“平山栄が自由に生きたのはいつまでか”

そう問う者を、平山栄は総じて、問答無用で蹴り飛ばしたくなる。

“今だ、今だよ、今なんだよそれは”

ナンパなんて思考、昔の自分には絶対にあり得なかった。俺は間違っていない、衰退してなどいないと、平山は少し怖い顔で駅への道を歩く。

ここで賢い者、自称頭のいい人間なら、右手の携帯で出会い系サイトにもアクセスして、街に着くであろう時間に会える女を用意しておくのかもしれないが、平山は当然の如く出会い系サイトには否定的な人間であり、その自称頭のいい他人の思考は、平山にとって別銀河の現象に等しく遠い。

何が嫌かと訊かれれば上手くは答えられないが、出会い系というもの自体に彼の持つ潔癖さが拒絶反応を起こす要素があるのは当然ながら、やはり平山はその形式めいた部分を受け容れられないというのが大きい。

『A』などは特に“形式”を受容する為の人格なのだが、それでもやはり、本能的な拒絶には抗えない。いや、抗う意味があるのか

と、むしろ考える。

ここには石間もない。あいつに意思を抑え込まれるのはもう別に苦じゃないが、誰も見てないところで自分を抑えることに俺は全く意味が見出せない

平山はそう思考し、携帯にデフォルトで入ったゲームを片手にしながら、「あ」と声を出す。

頭を過ぎったのは、ベランダから捨てたあのきわどい雑誌のことだ。平山家が入居するマンション前の入居者用駐車場、車と車の間に落下したことだけは確認した。家から出た時に、特に回収しようとも思わず、完全放置でここまで歩いてきたが、
「知らね」

今の平山にはそんなの、どうでもいいことこの上なかった。

2・愉快犯『A』（後書き）

もっと修行します。

3 パスタの少女

駅前の総合デパート高松屋の地下一階で輸入パスタを吟味する女子高生、それが弥永まこ、十七歳だ。ちなみにそれはただ吟味するだけではなく、弥永は鼻を擦り当てるようにして、そのパッケージの匂いを執拗に嗅いでいる。

「イタリアのにおいがする」

不審な目で見る店員と、同様の客が背後を過ぎ去って行く。

弥永は特別イタリアが好きという女の子ではなかったが、イタリアで製造され、梱包されたその商品に残ったイタリアの匂いを、つい嗅がずにはいらなかった。

具体的にどんな匂いがしたのかというと、弥永は的確に表現できない。ただ、日本と違う匂いがしたただけだ。

開けた背後の棚間通路を歩き交う少し上品な買い物客達と、またまた品の良い店内BGMに揺られてイタリアに意識が飛んでいた弥永まこは、ここでふと我に返る。まばたきを数回して、長い夢から醒めたような彼女は呟く。

「食おう」

手にしていた輸入パスタを一袋、弥永は購入することに決めた。

意気揚々と街に繰り出した平山であつたが、昼下がりのこの時間帯が致命的だった。

平山は基本的に年上の女は眼中にない。連中は母親を連想させるからだ。

では、その趣向からすると平山はロリコンなのか。そう、間違はなくロリコンだ。そして、極度のマザコンである裏返しがそのロリコンなのだと平山は自ら分析する。

母性に溺れたい自分と、そこから脱却し自由を貪ろうとする自分。平山はそのラインで、既に二極分裂している。

今の平山、『A』は当然貪りたい。貪る為にここまでやってきた。だがどうだ、街を歩くのは母親ばかりだ。急速に萎え出す気持ちを意識せざるを得なかった。

当然だろう。この時間、健全な学生は皆学校にいる。平山も学校にいればよかったのだ。あまりに統一されない自分の行動に、平山は毎度驚かされる。

だが一方でそれは理に従った結果である。愉快犯である今の彼、常に楽な方に力を発揮する『A』は、窮屈な学校という場ではこうも自由には振舞えないだろう。言い換えれば“卑怯”かもしれないが、平山はそれで十分楽しい。

そして

「ビンゴ……いるじゃん高校生」

高松屋の正面入口から出てくる弥永まこを、平山は捉えた。

平山が弥永に持った印象は、まず“大人しそうに見える”。

「いや……」

正確には違う。一重の瞼は、むしろきつそうな印象を受ける。だが、高松屋横の駐輪場から持ち出した自転車が巨大に見えるほどに小柄で、無頓着なだけのようにも見えるショートの黒髪と、何より、意図して押し黙ったような口元。彼女は所謂“何も言えないタイプ”だと平山は分析した。

それは好都合だったし、ドンピシャで好みでもあった。

高松屋前の疎らな人波、間を器用に縫って近づき、平山は声をかけた。

「第一女子だ。その制服」

突如現れた平山の右手人差し指は、弥永の丁度胸の辺りを指した。

「はい」

無害な小動物を連想させるような声が返ってくる。

「……」

ワンセットのキャッチボールが終わって、咄嗟に次が思い浮かば

なかった平山は 自分でも意味がわからないが、指した人差し指を、相手の頭頂部から、

「……？」

その靴の先までなぞるように上下させた。それに釣られるように動く弥永まこの視線。この時、平山は確信する。彼女はある程度の心理誘導が可能な人間であると。

欲を張って支配しようと思うなら、それには力技が必要となる。力技……石間の顔が真っ先に思い浮かぶそれを、平山は否定する。

わかんないけど、この子には悪いかもしれないけど、なるべくスマートに楽しくやればいい。だいたいそんな感じで世の中も回ってるしね

平山はそう考える。

「あー、あはは……えーっと、これから時間あったらさあ……」

微妙に上に逸らしながら軟派口上を述べ始める平山の視線は、しかし、自転車のスタンドを再度立てた弥永の動きに気づくことなく「別に忙しいならいいんだけど……」

そして、彼女の半歩の接近に不信を抱くこともなく、むしろ突然のそれに期待感すら湧かせながら、

「お茶」

平山は、次に放たれた腹部への衝撃に悶絶した。

みぞおちだった。ここを狙われたのは何年ぶりか。小学校の頃はヤンチャな同級生に幾度となく打たれた。中学に入ってからそれは石間先輩の仕事になった。

「えええ……？」

しかし、今、目の前の女子から同一のそれを受けたことに、平山は正直理解ができない。小さく蹲りかけの身体で、苦悶の表情をどうにか堪えて、辛くも開けた片目でその理解不能を見上げる。

「ナンパ最低……気持ち悪い」

その時、平山は、阿修羅を見た。

崩れ落ちて行くはずだった身体は、斜め下から切り裂くようなビ

ンタで持ち上げられた。

通常、どんなに調子に乗っていても一撃で大人しくなる平山は、二撃以上の制裁を受けたことがない。未だ悲鳴を上げる腹部に、追加で頭を飛ばされるような感覚がやってくるのは前代未聞のことだった。

そこに更に身体を浮かせ続けるような連打が、百五十五センチの弥永まこによって打ち込まれたのだが、どこかの時点で輸入パスタを額に突き立てられブツリと途切れた平山の意識は、それを記憶していない。

ぐしゃりと倒れた平山、と言う名のマリオネット。

「私、少林寺拳法やってるから」

それだけ言い残し、弥永は再度自転車を押して去っていった。

3 パスタの少女（後書き）

また続きちまちま書きます。ありがとうございました。

4・多面事象

例えば同じ何かを別の立ち位置の人間が見たなら、それは全く違った形に見える。同じショートケーキを、空腹の人間、満腹の人間が見る。苺の好き嫌いでもいい、立場が違えば物事はまるで違って見える。

つまり多視点。多重人格によって起こる弊害はそこである。

平山は、彼と行き交う群勢を囲んだ暗い街空の下で、激しい後悔に苛まれていた。

仰向けに見上げた薄雲からは僅かに雨が振り出した。

「私はなんてことを」

相手は人だ。少なくとも自分と同じ。それを単なる興味でナンパして持ち帰ろうとするその横暴。

自分はある女子から直にタコ殴りにされた。全身は軋んで、顔面が火を吹くような熱を持ち雨粒がしみる程だったが、それは平山にとってむしろ痛みが足りないと言われた。彼女の手も煩わせてしまった。次に会ったなら、もし会うことがあれば、土下座の一つでもしなければ気が済まなかった。

平山は壁にぶつかったり嫌なことがある度に、『視点』、『基準』、『価値観』、あるいは彼が呼称するように『人格』が変更される。それによる弊害は、まず多視点による自己の混乱。物事を白と見る自分がいれば、同時に黒と見る自分もいること。真実に迷うのは誰しもであるが、平山栄は自分の真実が多数存在することで既に迷う。

そこから派生するように、周囲のレスポンスの明らかな違いにも平山は戸惑う。恐らく周囲も下手をすれば平山以上に戸惑うことであろうが、例えば石間先輩が顕著な例である。彼は同調されるかされないかで敵味方を判断する為、石間同様ナンパが十八番の愉快犯

Aとの相性は良い。

だが逆に、Aという思いやりのない人格がそれ以外の他者の気持ちを散らしていくことを、平山は今痛感した。

それを思うのも、彼の中でaと呼称される女性的人格の価値観あつてのものなのだが、そうして複数の自分を呼称によって簡単に区別もできない程に、もう人格は複雑に細分化されていた。このaですら、以前の同人格とは似て非なるものとなっていた。

（何かの価値を得る為に、私はその都度分裂していった。こうまてなつたら、もう統合することは困難だつてわかる）

恐らく、複数いる自分と仲良くできるのならば、考え方の違うそれぞれの自分を認めて、状況で使い分けることができようものなら、平山栄の未来はきつと明るい。だが、それに薄々感づきながらも、施行する余裕が平山にはまだなかった。

精神疾患 広義には、いや広義でなくとも平山はそれかもしれない。しかしそれを考えると、平山は自身が病院に担ぎ込まれる姿を連想し、更に以前読んだロボットミ―手術の記事の記憶が蘇る。前頭葉を切除され、自己を切り取られた患者が存在したという事実、それに自分を重ねて平山は吐き気をもよおす。

というか、今吐き気をもよおした。

立ち上がるうとした平山は、今度は逆側に倒れこむように両手をついてうずくまつた。軽く涙ぐみながら、強く思考した。

（ぜったい医者になんか見せてやるもんか……。私は複数いるからわかる。人はむしろ善意の中で間違いを侵すんだ）

医療不信。平山が一人で自己を探ろうとする動機の根底はここにあると言っても過言ではない。

その結果として彼は複数に増えた。決して焦点の合わない彼らの視線。共通の答えが導き出されることはない。誰か一者を選択し、他を切り捨てなければ、平山が確かな何かを得ることはできない。

指針も何もかも混乱したままの平山は立ち上がり、ようやく歩き出す。彼が前に進まずとも、耐えず時間だけは動く。目的がなくて

も、せめて、周囲に合わせて歩くしかない。

雨は少しして止んでいた。平山が身体を引きずって自宅前のマンション専用駐車場に辿り着いた時、そこには一つのショートケーキがあった。つい数時間前の彼が投げ捨てた、エロ本と言う名の多面^{ショー}トケーキ^{トケーキ}事象。マンション住民の主婦達によって祭り上げられていた。

五人程で輪になって、そこに落下するまでの軌道計算から、どの部屋から投げ捨てられたかを考察していた主婦達の視線は、道端から現れた青少年平山に集中した。

「あら、平山さんのお家の」

「お帰りなさい」

「ちよつと、これ、これっ」

主婦の一人が手に持った本を周囲に示す。平山の持ち物でないかを聞いてみると。他四人も目を見合わせ、頷いた。

「あのね平山さんの坊っちゃん、さっきその車の間にこんなものが」

平坦な足取りでやってきた平山は、その行動に迷うことなかった。

「わた、ぼく……おれのです。その本」

一人称は安定しなかった。

主婦達の顔が少し固まる。

「すいません。むしろくしゃすることがあって、窓から投げました」
百パーセントの謝罪というものがある。自らの非を全て理解した上での謝罪だ。

平山は本を手にした主婦の目に、全ての懺悔の意思を示した。
理解し、また自ら理解しようとする者に教え説くことはない。主婦達は、エロ本投棄の是非を超え、平山の真摯な姿勢に飲まれていた。

「ま、まあ……ね」

「あるわよね、そういうのは」

「これからは気をつけてね。何より危ないから」

「はい」

「平山さんには内緒にしとくわね」

「あ……はい、すいません」

本を受け取り、もう一度、浅くもなく深くもない角度に頭を下げ、立ち去る。マンション階段前でまた振り返り、再度頭を下げ、階段を上っていく。

a 苦悩する女性人格。彼女は周囲との調和を保つ能力に長けていた。

一方で、苦悩それ自体に精神をしばしばやられる自己破滅型でもある。

不安定であるからこそその一面特化。人にプラスとマイナスの両側面があるのは必然だ。

何度も言うようであるが、長短のある複数の人格をそれぞれ認める、的確に使い分けることができるのならば、平山栄の未来はきっと明るい。

4・多面事象（後書き）

自分を理解してくれる人を一人見つけました。それは過去の自分自身です。

読んでくださってありがとうございます。

5・Host personality 『The third A』(前書き)

なぜか英語

5・Host personality 『The third A』

平山栄がこれから生きていくに際して、彼の主人格を決める必要があった。それは最も保守的であり、嘘のない人格。多種多様な他の平山栄を統合できる唯一の者。

他の人格はその特性の為、突飛な行動に出がちになる。世界平和を望む余り自己犠牲を厭わないaがその最たる例だ。

日常を無難にこなす為のオールマイティな人格が、主人格には相応しい。

悪く言えば優柔不断、無気力とも言える。動かない視点から物事を見つめる。

彼は、第三のAと呼称された。

僕が……僕が主人格であることを忘れないようにしないと。

彼は平山栄の中で最も無難な判断が下せるというだけで、人格としての力が強いわけではない。周囲の正当性を探ると同時に、常に自分自身にも疑いを向けている。自分自身が主人格に相応しいかどうかも考えている。足元は常に危うい。その為、うっかりしていると平山栄の操作を他人格に乗っ取られるのだ。

自分が平山栄の中で最も優れていることを忘れないように……自信のない彼の頭の中はそれで一杯だった。

「栄、買い物は？」

珍しく居間のテーブルに腰掛け、腕を組み思考していた平山にキッチンから母親が呼びかけた。

「買い物？」

「さっき頼んだじゃない。それそれ、テーブルの上にお金とメモ置

いとしたでしょ」

母親の口調に若干怒りの影が見え始める。平山の顔は依然、クエスチョン。疑問の色。おそらくほんの数分前のことを言っている母親。平山は全く覚えがない。

「え？」

これが人格交代時の記憶差異である。

脳使用領域の変更により、記憶できる事象の種類がその都度変わる現象。

正確には、母親からの頼み事は記憶から喪失したのではない。母親のそれに頷き「まっかせてよ、母さん」と言った平山の端役の人格が今はいないだけだ。

第三のAにとっては、スーパーのタイムサービスや母親の他の用事などのことなどどうでもいい。一人ぼーっと、自分が平山栄の主人格に相応しい性質であるかどうかを考えていた。

「うーん、めんどくさいなあ」

先程と言うことが一転する。

母親は若干青筋を立てつつも、この彼のよくある現象に関しては慣れの為か軽くスルーした。

「いいから早く行つてきな。学校早退してきたと思えば座って置物みたいになってから。勉強しないならしないなりに家の役に立ってよね」

「へいへい」

渋々、平山はおつかいという小学生的なイベントを再度了承。代金である千円札二枚とメモを手に取り、家を出た。

無関心傾向の母親。平山が“こう”なったのはこの母親の教育が一因しているのか。

（知らない）

父親不在の家庭環境の為か。

（関連性が見出せないな）

彼が彼である為か。

（僕が僕であるからだ。それ以外に理由なんてない。石間先輩もこの世界のただの景色に過ぎない。あの人と関わったこと自体はなんでもなくて、そこから僕が感じとったことが問題なんだ。“今”は誰のせいでもない。これは僕が選んだ道なのだから）

平山の統率人格は、いわゆるしつかりした性格の持ち主だった。

立派であるとも言える。

だがそれが『立派である』以上の結果を彼にもたらすのかは不明。

彼は結果よりむしろ『立派である』生き方に重点を置いている。それが傍から見て滑稽であるかは、不明。

いや、そもそも彼の生き様など誰も見てはいない。それが実際のところ。クールな実情。妥当な現実である。

ぼろっ、と。

平山はレジで手にしていた財布ごと中の小銭を全落下させた。じやらじやらじやらと小銭、拡散。

店員の目は、会計しようとした姿勢で固まる平山を見た。その平山の目はレジ処理後の袋詰め台前に立つ女を見て、日常ありえない程に開いていた。

女は背後に目でもついているのか、平山の凝視に振り返った。そして、決して先攻的に他者に向けられることのないはずの構えをとる。

数日前に平山をのした女、弥永まこである。静かながらも、野生動物のように威嚇する視線がそこにあった。

またパスタを買っている。多種多様な形状のそれが台上の袋から覗く。平山は思う。

彼女は狂っているのか……そんなにパスタを買い込んで何がしたい……！

弥永の足が一步踏み出す。ここは平和な街だ。主に家族連れが買い物をする為のスーパーマーケットだ。

戦闘行為が行われようとしている。この日常で、一方的な傷害行為がまた

「まっまっ、待って！ 待ってくれ！」

両手を伸ばして 否、すくんで伸ばしきれていない両手で平山は制止を試みる。

それを無視して弥永は直進。足元の小銭をローファアが鳴らした。平山は必死の形相で声を張る。

「敵意はない！ 僕は多重人格なんだ！ 君に失礼なことをしたのは僕じゃないんだよ！」

小銭の音が止んだ。平山のメートル目前、前回の技の射程圏内に彼女が進出したまさにその時であった。

「……多重人格って？」

弥永の周囲で浮き上がった闘志が空中静止していた。

「い、以前会った時の僕、今の僕。僕は二人いる。いやもつという数えきれないほどにいる」

レジ業務も途中の店員は呆れを通り越して半ば感心するような顔をした。そのはずである。このような言い訳が通れば世の中に警察は不要となる。

しかし弥永は、平山の辛うじて論理的な弁解に耳を傾ける様子だった。

「君のことは覚えている。軽はずみに声をかけ、反感を買ったことはしっかりと記憶にある。でも僕は何故あんな行動に出たのか、自分でわからないんだ」

「自分のことなのに」

「そう……そうだ。無責任極まりないことは承知している。でも今の僕……今は僕は申し訳ない気持ちでいるんだ。後から振り返って君にどうしても謝りたかった。だから……」

会えて嬉しいよ。

と、平山は言う寸前で思いとどまった。言えば即時、殴られることが想定された。

「はあ、お客さん病気ですね……病院行けば……」

気づけばレジ台に隠れるように屈んで小銭を拾ってくれている男性店員。「別に後ろ客つかえてないけど、とりあえず会計済ましてからやってくれませんか」

そう言われ、平山がへらへらと謝りながら自身の小銭を拾う。

じっと見ていた弥永も、一応な感じでそれに参加した。

6・振動

なんだか僕がまともに見えてくるな。

冷静に見ればそうであつた。外見上は平凡な平山に対し、弥永まこは表面的におかしな女だ。下手をすれば平山と同じく病氣。もつと下手をすれば既存の病氣にすら当てはまらない。

彼女の手持ちの袋にはまさにパスタのみ。ささやかなソースの類も見られない。平山は弥永がこれを食用に買ったのかどうかの段階から最早疑い始めていた。戦闘用じゃないのかと。

スーパー前の駐輪場。またしても駐輪場である。弥永は自転車のカゴにパスタがいっぱい袋を入れ、嚴重なことに二箇所ついた鍵を解錠する。

自転車を引いて歩道に出てきた弥永に、平山は恐る恐る、その質問を口にしようとする。

そのパスタ、食うんですか。

「……」

しかし軟派じみていいると思ひ、また暴力を振るわれるのも嫌なので大人しく口をつぐんでおく。

先程の対応は悪くなかつた。好感触かどうかはわからないが、少なくとも殴られるような不快感は与えなかつた。多重人格を暴露するのは正直平山自身どうかと思つたが、拳に追い詰められるあまりあるがままを話したことは結果的に正解のようだった。

ところで、今の平山はAのようなナンパをする気分ではなかつたが、人並に異性が好きなのは変わらない。別に異性でなくても、と彼は弁明気味の思考になるが、どちらにせよ他人と仲良くできるなら最上。それがたまたま女の子であれば最最上。目の前の弥永のようにツンと棘を立たせて威嚇するような雰囲気の子がドンピシャ好みであることは、どの平山栄であつても変わらない。

飾り気ない感じの髪に、童顔。（平山は口リコン）その中で一重

臉がいい味を出していること。依然としてパスタに関しては大いに謎が残るが、平山の提唱するキャラクター論的に「脇役、それでいて大本命」の位置にぴったりと当てはまる人物設定である。

よくこんな微妙な立ち位置の女の子が現実にいるもんだなあ。やつぱりパスタが邪魔だけど。なんだ、パスタはなんか、イタリア文化に傾倒しているのかなのかな。

平山がそんなことを考えている間に、弥永は自転車を漕ぎ出して既に十メートル進んでいた。

「ちよっ……おいおい、ちよ、ちよっと！ 行っちゃうのかよ！」
平山のバタバタした呼びかけに、弥永はもう五メートル空走してからようやく止まった。

走って追いついた平山に、言う。

「気持ち悪い、多重人格」

「え……」

半笑いで硬直。

「虚言だとしても本当だとしても気持ち悪い。お近づきになりたくない。私の前から去って。今すぐ去って」

「去って……」

ぐらりと、平山は揺らいだ。第三のAが揺らいでいた。

まずい。僕が主人格であることを……。

平山はここ数年間、これの繰り返しであった。現実に通うしなくなる度に別の自分を試し、それが揺らげば、また次。仮面をすげ替え、何度もすげ替えて、気付けば散らかった部屋のように、何百もの自分が彼の中に存在していた。

僕には力がない。

彼女に好かれるだけの力が。

僅かに生じた、仲良くなれるかもしれないという期待が、彼を固執させた。

大丈夫、大丈夫。

お前は弱くて、少し傷つきやすい。

辛いだろう。人間、傷つかないのが一番だ。タフにいったらいい。

オレなら万事うまくいく。

甘く囁くのはいつだって、ずる賢い詐欺師だとか、ギャンプル煙草工口画像、誘惑それ自体ではない。

囁くのは自分自身だ。

フラついた足元を見事にすくっていくのはいつだって、自分自身。

「おいパスタ女」

低く、平山が言った。

その罵倒になるかどうか怪しい文句を、弥永は聞き逃さなかったらしい。自転車を降り、スタンドを立てて歩道の真ん中に停めた。数歩進んで、それらしい中国式の構えをとった。静かに口を開く。「本当はよくないけど、嫌な男には技使っていいことにしてる」「軽蔑に近い視線は、そのまま平山を補足していた。

「あのさ」

平山は笑った。

「そのパスタでオナニーとかするんですか」

弥永の体が曲線的に動いた。捻りを加えて突き出した初打。

それを平山は蠅を叩くように、手ではたき落とした。

「ほらな！ やればできんだよ！」

平山の目は大きく見開いていた。驚くべきことに、弥永まこの動きを追っていた。

弥永が冷静な面持ちで連撃に入ろうとした、その懷に平山は飛び込む。突きを放った左手を腹に受けつつも、がっしりと掴んだ。即座に全身を捻る。

すると、弥永の体は浮いた。

平山の背の上を、円を描くようにして。

その直後、ずだん、と地面に衝突した。

一本背負い。春先に行われた柔道の授業中一度も成功しなかったそれを、弥永の体格を見て、ひよっとしていけるんじゃないかと思

った。案の定、これは人なのかと思うほどに彼女は軽かった。

平山は満足げに笑った。名前のまだない、高機能の身体感覚が倫理観より先行する、新しい平山栄。

「これでも虚言だって？ あと気持ち悪い？ もっかい言ってみるよ。オレに向かつてもう一回言ってみる」

有無を言わさない質の声音。反論すら認めない、固く凝結させた意思。以前の自分への嫌悪、反発から生まれた、勝つための人格。

「よくみたら全然好みじゃないな。かわいくない」

弥永は背中を打ち付けられたまま動かなくなっていた。頭も打つたように見えた。平山が腕を離すと、するりとそれは垂れ落ち、アスファルトの上に甲がぶつかった。

「なんか、この前と構図が逆になったな」

平山は雄弁だった。元々の内に溜め込む性質が逆転しているのだらうと自己分析した。

今なら誰にだって負ける気がしない。何せ、勝つための人格なのだから。怠慢、情け、柔な感情、勝つためなら何だって捨てられる。ははは。

平山は高らかに笑いながら、大股でその場を後にした。

7・ダブルスタンダード

平山は少し歩いて、街近くの公園のトイレに入る。用は足さず、入るなり、手洗い場の鏡を覗き込んだ。

面白いほどに人相が変化していた。目つきが異様に鋭い。鏡の中の人物は、睨みつけるという行為を容赦なく継続していた。何を見るにも目を逸らしがちな普段との差が激しい。

手に持つ買い物袋をちら、と見た。そういえばおつかいの途中だった。今の平山は積極的性格である為、面倒くさがらず寄り道もせず、まっすぐに家に帰ることを決めた。

公衆トイレを出る。日没にはまだ早い。これまで季節も不明であったが、実は真夏である。日差しが強い。しかし平山の目は眩まない。強いから。

大股で風のように歩く。小さな公園を出る。買った品物が悪くならないうちに……、そういえば何を買ったのか。記憶が入れ替えられ、思い出すのが困難だ。思い出そうとするより直に確認した方が早い。

袋の中には白ネギが入っていた。合わせ味噌も入っていた。その他、色々入っていた。牛乳や肉類はなかったが、この気温だ。急ぐにこしたことはない。

歩調を早める。走ってもいいかもしれない。いや、走りたい気分だった。肉体を激しく使いたい気分。

道の向かいから、歩行者の姿。学生服だ。平山はそれを気に留めない。走ることを決断した。一步、駆け出した。

「おい平山」

突然の声に、つんのめる。うまく道でブレーキングして、振り返る。そこには石間先輩がいた。

平山は、しめた、と思った。石間は、急ぐ自分を引き止めるだろう。それを制して、振り切れるかどうか、今の自分を試すにはうつ

てつけた。

どんなピンチも落とし穴であつてもチャンスと感じてしまう精神状態というものがある。今の平山がそれだ。勢いで空も飛べるかもしれない。無論幻覚であるが、幻覚を見ない者よりも、ましてや飛ばうとしない者より、ずっと遠くへ行けるのには違いない。当然その理論は今の平山の飛躍した精神に内包されている。

「先輩」

少し手が震える。力を振るおうと身体が焦っているのだから当然の現象だ、と肯定的に捉えた。

話すのに自然な距離まで近づく。石間の長身を感じ始める。この時点で、柔道技は選択肢からロストされた。更に一步進む。石間の威圧が近づく。すると、先手必勝で殴りかかろうという選択肢が消えた。有無を言わさずの暴力は、相手である石間からも受けたことがない。その倫理境界を越えることはできない。

石間の目。平山を見下ろす目が、途轍もなく凶暴であることに気づく。他人は鏡であるから、当然だ。納得しつつも、震える身体の異変と次々潰えていく選択肢を止めることができない。

遂に、平山の中で暴力自体に疑問が湧いた。

「てめ、なんか今日、ツラが生意気だな」

ドスを効かせた声で石間が言つと、同時に、名もなき暴力的な平山は消え失せた。

数秒、空っぽの身体。第三のAが高速で呼び出される。表情が元の温和なものに戻る。しかし、思考に時間がかかる。状況を捉え直し対策を出すまでに「あ?」「聞いてんのか」と言葉を浴びる。

平山は顔を手で覆つて、下を向いた。溜息をつくように、「先輩先輩だつて気づきませんでしたよ。走るのに夢中で」

指の間からちらと見た石間の顔も、次第に人懐っこい質のものになる。やはり鏡のように。

石間は言う。

「馬鹿か。無意味に走ってんじゃねーよ」

石間は次にとんでもないことを言い出した。「人間、歩いてないと景色の綺麗さもわかんねえんだよ」いったいどこで覚えたのかと苦笑しかかったが、たった今の自分を振り返れば、決して馬鹿にできない言葉だった。

「買い物かよ。親のお使いか」

「はい」

「まあ、ちゃんとやれよ」

石間は信じられないくらい朗らかに笑った。そして、じゃあな、と言い、踵を返して、去って行った。あっさりと。

あの人は……。平山は呆然と見送る頭で考える。あの人は、家や親というものに対して厳格な考えの持ち主だ。親父的というか。中学の頃からそうだった。そんな石間先輩が、買い物帰りの自分を無理に引き止めるなんてこと、元々あるはずがなかったんだ。

感覚が飛躍しすぎて何も見えなくなる。それは当然、凶器となり得る。背負い投げして動かなくなった弥永のことが頭に浮かんた。そして、公平でなかったことが平山の頭を苛む。石間に敵わないと知るやいなや、弥永にした暴力を手のひら返して取りやめた、自身の卑怯さを思い知った。

「ぼ、ぼくは女にばかり」

愕然とした。それは、心の内で最も嫌悪していた質の野蛮さだった。弱者にのみ強い、最低の人間に、自分はなった。

平山がまた駆け出すのに時間はかからなかった。暮れかかった陽射しの中、元来た道に戻って行った。買い物は失敗かもしれないが、迷いはなかった。

8・紆余曲折のベクトル（終）

かつ、と、視界に眩しい白色が広がる。

「お疲れ様。いやあ、面白かったね」

中年のような質の、男性の声。こちらを観察して楽しむような、そんな嫌な感じがする。

「まず、自分のことを第三者のように語るのが興味深いね。あと、語り口がころころ変化するのも面白い。結局のところ、平山栄は多重人格なのかね？ そんな気がするだけなのかね？ そのあたりがはつきりしないな。まあ認識にブレがあるんだろうね」

身体がだるい。僕は中年の前で、椅子に座らされている。

眼鏡の中年、白衣を着ている。これは……診察のようだ。彼は医者か。僕は今まで何をさせられていた。

白色の壁と天井。医者が座る椅子の側には机。銀のラック、中には色とりどりのファイルが詰まっている。

机の上の数冊の本が目につく。『精神医学用語集』、あと、鬱病関連の本とか。精神科……精神科。ここはそういう病院だ。僕は精神科の治療を受けたんだ。僕自身が認識する症状を、僕は自らの口で供述していた。いや、させられていた。僕が簡単に自分のことを他者に話すはずはない。恐らく、薬とか、催眠によって供述させられていた。

医者後ろに、女が立っている。頭に包帯を巻いて、平たい皿を片手に、スパゲティをすすっている。弥永まこだ。

ふと、医者の胸元を見る。ネームプレートに、『弥永』とある。なんと……。

「怪我をした娘を送り届けてくれたのには感謝するよ。しかし、怪我をさせたのも君自身だというのだから、褒められたことではないね」

すみません……。そう言おうとしたが、なんというか意識全体が

だるくて、言葉にならなかった。

「まあその件はいいとして　少し頭を切っただけだったしね君の症状なんだけど」

うわ、どうでもいいけど、間に補足を入れるみたいな喋り方、無理だわ。

医者はペンで何か書き留めてから続ける。

「僕もね、この仕事で色んな人間を見てきてるから、君と同じように考えることはあるんだよ。要は、善にしたりってあまりに複数の善があつて、どれを選択するか迷うということだろう？　人や物事には表裏一体の長短があり、極端なことを言えば、百人殺せば英雄という考え方が適用されるならば、悪というものはどこにも存在しない。そういうことだ。君はまあ、端的に言えば、多種多様な価値観の中で優柔不断に陥っている。面白い言い方をするなら、高校デビユーを繰り返しているようなものだね」

医者は笑みを浮かべた。弥永まこは依然パスタを食べている。

「つまり君は、新しい自分を試す行為を何度も繰り返しているんだ。懲りもせずだね。まあ普通なら、一度デビユーに失敗すれば人目が怖くなって引きこもるんだが……そうならないのは相当の厚顔無恥とも言える」

「引きこもりは昔一度経験してますから……。もうしたくなかったんでしょう」

僕はようやく喋ることができた。

「おや」医者は嬉しそうに「意識がはっきりしてきたようだね。しかし、自分のことをやはり客観的に話すね君は」

「自分のことは一番よくわかりませんから」

医者は吹き出した。その後ろで弥永はまだ食べている。こちらのやりとりにもまるで興味がないうちに。

「そうだろうね。自分がよくわからないの症状だからね、君は」それから医者はひと呼吸置いて、若干真面目な口調に戻って言った。

「結論から言うのだね、君のような人は大勢いるんだよ。自分を多重人格とを感じる人はね。子供とか、普通の社会人にもこういう人はいるし、あと芝居をやる人にもこれが多いのが面白いところだね。理由はなんでかって、そりゃあ複数の人格を演じるからなんだけど。まあお芝居を仕事にしない人でも極々普通にこういう人はいる。人間は大半が日常的に演技をするものだからね」

そうか。なら尚更、僕のような人間は放っておいて経過をみるしかないんだろう。

「どうも、ありがとうございました。あと、娘さんのこと」

僕は弥永の方を恐る恐る見る。

「すみませんでした」

僕自身も被害を受けてはいたが、なんにせよ僕が混乱していたことで一番迷惑をかけた相手だ。依然パスタを立ち食いすることに夢中で、気にしていないというか興味が無い様子なのが救いだっただ。

僕は二人に向かって頭を下げた。

「いや、いいんだよ」

医者がまた笑った。嫌な笑いだった。

と、ここで僕は引つかかる。催眠療法と薬物投与、患者の了解も得ずにそれをやるのは強引じゃなかったのか。医者の笑みには、まるでその利益でギブアンドテイクしたというような含みが見られた。患者の了解も得ず……というか、そもそもその時点では僕は患者ですらない。そんな彼の乱暴さ、その一点のみが引つかかった。

しかし、乱暴というならまさに僕自身のナンパや一本背負いといった行動こそ乱暴だ。他人のことを言えた立場じゃない。自省の念と共にそう考えたときだった。

「では、君には薬を処方しよう。向精神薬。そうして常にフィクションを考えてしまうこと、多重人格などの架空に頭が囚われてしまうことを防ぐことができる」

彼が言いながら机の上に何か筆記をした。薬、という言葉にやはり僕は警戒した。そこから始まった。状況をまる鵜呑みに信じかけ

た心が、疑惑を抱きはじめる。この医者 of 強引さに、やはり違和感を覚える。なにかおかしいところはないか。強引であろうとするのは、そう、何かに目を瞑って推し進める必要があるからだ。僕自身がそうだった。

なにかあるはずだ、論理的に破綻した箇所が。僕は薬と催眠で喋らされて、恐らくそれを机上の紙に記録されていた。または録音されていた。僕は他人事を語るように、自分のこれまでの足取りを説明していた。だとしてもその内容はすべて僕の経験であって、だから……

だから、僕が知り得ないはずのことを僕が語れるわけがない。

僕は二人を見つめる。医者 of 胸のプレートには『弥永』とある。

「どうしたね」医者が怪訝な顔をした。

「僕は何故、弥永まことという名前を知っていた？」

「む……」

医者は手元の紙に目をやる。七枚程 of 用紙には、走り書き of 形だ that はつきりと『弥永まこ』 of 名が記されているのが見える。それも弥永まこのスーパーでの買い物 of 様子が詳細に記されている。パスを数種類買ったこと、イタリア文化に傾倒していること。僕 of 口述した内容に、弥永まことという他人 of 情報が含まれている。そして今の僕自身も、思い出そうとすれば、弥永まこを俯瞰していた記憶が蘇る。

「どうということだよ、これは」

誰に言うでもなく僕が言う to、医者はまいったと言うように首をすくめ、力無く微笑んだ。

「いやあ、この展開は流石に無理があつたねえ」

その時、部屋内 of 色調が反転する。これが現実でないことが、あまりにわかりやすい形で明らかになった。

「僕 of 中での出来事なのか、これは」

「自分自身を診断する、精神医 of ような人格もあつたということだね。改めまして、平山君、弥永耕作だ、よろしく」

そいつの差し出した手を、僕は叩き落とす。彼はにやりと笑って、後ろの娘を指す。

「娘のまこだ。君はパスタは好きかね。いや、好きはずだ。ついでにイタリアも好きはずだ。なぜなら」

「じゃあ、本当の僕の現実はどこだ」

彼の言葉を打ち切って叫ぶ。すると、後ろの弥永まこと目が合った。

「病院のベッドじゃないの」

「それが布団の中だ。朝日を浴びて、普通に起床して、君はもしかしたら乳幼児、もしくは学生、もしくは社会人」

医者が続ける。

「君は医者が嫌いだそうだね。医療不信、と、この紙にも書いてある。その一方で、そんな自己を常に疑う性質も君は持っている。だからこの弥永耕作という人格も生まれたのかい？」

そうかもしれない。

「弥永まことというわけのわからないキャラクターを君の中に残してあるのは何故だい？　そういったお遊びは棄てた方がいいのではないかね？　もう一度言うが、君はただ優柔不断なだけの人間だ。自分のとるべき明確な指針が決められずにいるだけの、それは病氣とも呼べないお粗末なものだよ。大人になりたまえ、平山栄君」

大人になりたまえ。

選択をしたまえ。

目に映るもの何もかもを笑って済ませるのか。

夢見がちな少女のように、ただ平和を願うか。

自己を欺き、上っ面をひたすらに整えるか。

腐った理性を吹き飛ばす、盲目的野蛮さに従うか。

選択をしなければならぬ。

しなければならぬのか……？

迷いが、渦を巻いて僕に迫る。渦を巻いて、渦を巻いて……

どん、と、巻きに巻きまくったトイレットペーパーを、窓縁に置いた。

皮膚が空気をを感じる。ずっと開いていた視界に、映像が焼き付けられる。

青い、壁。換気窓。

不快な臭いがする。こびりついた排泄物の臭い。ここは、公衆トイレの個室だ。

「おい、平山あ！」

トイレ内に声が反響する。暴れるような声、石間秀人……。

僕は、選択をしなければならぬ。トイレに飛び込んで時間を稼いでいたけれど、複数の自分に頼ろうとしていたけれど、だめだ、現実はある、迫ってくる。

ドンドンと乱暴にドアが鳴らされる音。

決心、したんじゃない。僕は必要に迫られて、手を伸ばす。ドアのロックに指をかけ、外す。キイイと音を立てて、ドアは触れなくても勝手に開いた。

石間先輩が立っていた。

「おうおう、まあ付き合えよ、平山。街までよ」

選択……選択……

選択ってなんだ。何のために選択するんだ。

誰の為……

こいつの為……？

石間先輩の顔を見上げる。僕は、こいつの為に、トイレに籠って頭を抱えていたのか。そうかもしれない。断れないから。断るという選択肢を始めて潰していたから。

それって、嫌いな相手への気遣いじゃないか。そんなの『嘘』だ。僕の本心じゃない。自分を殺して、ただひたすら衝突を回避していただけなんだ、僕は……。

「どうした平山、あ？ 行くだろ、ついてくるだろ？」

行けません、と言うのか。財布に千円しかない、それは今日明日の飯代だから、行けません。

違う。それとは無関係に僕は石間先輩と並んで歩きたくないんだろう？ 嫌なんだろう？

ならそう言うのか。言えるのか。言えるわけない、それこそ、僕という人間が変わらない限り。しかし変わったとすれば僕はもう元の僕じゃない。人格のぶれた、別の人間だ。

「平山、さっさと行くぞおい！」

「いや、その……」

「は？」

「……」

「なんだよ、え？」

「まだだ、まだ……」。

全身が、変なふうに震えてきた。明らかに異常。でもな、これが僕なんだよ。こうまで追い詰められないと本当のことなんて言えない、場が整わないと行動できない、そんな卑怯者なんだ。

石間先輩は僕ににじり寄る。胸ぐらを掴まれる。くる。

「てめえ！ ハッキリ言えや、行きたいのか行きたくないのか」

「行きたくありません」

僕は、優柔不断を選択した。恐らくは、優柔不断な本心を。

石間先輩は、面食らったような顔で、黙り込んだ。

詰問した当人である彼は、自らが捻り出させたその答えを不当として怒りをぶつけることはできない。

拒否のタイミングを待つこと。僕が暴力から逃れられ、自己も見失わない唯一の方法がこれだ。

石間先輩は、少し傷ついたような顔をした。しかしすぐに調子を取り戻して、「じゃあ今度な。今度絶対付き合えよ」と言う。彼は恐らく、そういうタイプの一種の依存気質。平たく言えば寂しがり屋な面があるんだろう。僕の中の弥永医師がそう言っている。

「絶対な」

「ええー……」

僕はあからさまに嫌な顔をした。

自分でも意外に思った。こんな対応ができるようになるとは。少しでも反感を示したら殴られるんじゃないかと恐れていた、あの石間先輩に、僕がこんな返答を……。

当然その後、罵られつつ、後ろから軽く首をひっ掴まれたが、あまり不快じゃなかった。

トイレを出て、先輩と並んで公園を出た。

「じゃあな」

そう言って手を上げて、石間先輩は街の方に去って行く。僕は一応な感じで頭を下げ、彼とは反対側へと歩き出した。

上手くやれたのか。あの石間先輩と。今となっては、何故なんなに苦戦していたのかもよくわからない。人は誰だって欠陥を抱えているから、相手にまず与する形ではそれに巻き込まれることになる。少なからずの否定というのが、何に対しても必要だったのかもしれない。彼に対しては、対立することが特に。こんな実際、生きていく上で初歩の初歩なんだろうけど。

夕暮れの空、少し涼しい風が吹いた。

ふと、弥永まこのことを考える。彼女は僕の中の人格の一つ、いや、妄想だったのか。僕は彼女に拒絶され、次には怪我也させた。彼女は僕にとって、欲する対象だったのかもしれない。石間先輩から逃げていたのとは反対に、彼女は僕の向かおうとする目的だった。どうにかして好意を得たいと思う相手だった。

だが、妄想だったのだ。パスタを数種購入し（本当に意味がわからない）、武闘派で、小柄で、無口で、こちらに容赦ない敵意を持っている、そんな作られたような女が現実に存在するはずがない。

「はずがないんだ」

僕は足を止めた。街の方を向いた。

どうやら、どこまでも極端に自己に忠実なようだ。今の平山栄という人間は。

「先輩、やっぱり僕も行きますよ！」

僕は声を張り上げた。先輩は振り返り、なんだそりやと混乱を口にする。気が変わったんですと僕は返した。千円しかないけど、牛丼食べましょう。奢りますよ。腹が膨れたら、それから。

「ナンパをしにいきましょう！」

先輩は呆気にとられた顔。

僕は走る。急ぐわけではなく、足がそのように動くだけ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266t/>

第三のA

2011年11月1日08時13分発行